

MILGENDO

Marathon

Part1

Sample

For Adults Only

MarasOn Part1(sample)

とりさん

以下本編より抜粋。書式は本編と同一です。あなたの環境で正常表示できるかご確認下さい。本編には伏せ字はありません。

1

1

正月三日が明けて、僕は再び日課の早朝ジョギングを開始した。もともと、二日は仕事だった。僕は入院棟のあるわりと大きな総合病院の勤務医だ。……中途半端な二日に仕事が入ってしまったせいで、

旅行もできなければ深酒もできなかった。まあこんな年もあるさ、と思いいながら、特に気持ちを切り替える余裕もなく、新しい年を迎えたわけだ。

それでも今は何とかやれそうな気がしている。いいこともある。入院や長期の療養を経てある程度長い時間接した患者や家族とは、信頼関係ができ、尊敬や感謝もされる。

僕は少年愛者だ。僕が一番好むのは■期ちよつと手前から■くらいまでの少年だから、患者の男の子の多くはいささか幼すぎるのだが、それでも好みの子との接触はそれなりに楽しめる。元氣になつた時が別れる時、というのはこの職業の宿命的なつらさだが、僕好みの、いわば将来有望な若い男の子が手を振ってさよならをしてくれて、後に年賀状が

った頃は、■年生に見えた。短髪の時もあつたが
 少した髪が伸びると柔らかな癖毛で、ウェーブした黒
 く健康な髪が眉にかかっていたり、額に貼りついて
 いたりした。愛らしい丸顔で、二重のくりくりとし
 た目をしていて、色白い頃は今よりもつと頬がぷく
 りとしていた。頬が白いで、走つて血の巡りがよくな
 て、いるので、頬がいつもほんどの朱く染まつていた。
 夏場はランニングシャツで走っていることもあつた。
 が、それだと腕や首のあたりも、白い肌は朱に染ま
 り、汗がにじんで、シャツは素肌に貼り付いて、エ
 ロチックだった。今も丸顔は変わらないが、■期
 が近づき、少しずつからだつきは幼児あつてから、
 けだして、毎朝のジョギングの成果もあつてもし
 に腰から太腿あたりには、ジャージの上からでも、細

身ではないが、がちり型には遠い、しなやかな感じ
 の肉体だった。彼は歳のわりには小柄なんだろう。実際の
 歳を知らないから、本当は何とも言えないのだが、
 ずっと父親（よく考えれば、これもあるか、めたわけでは
 ないが、普通に考えれば、そうだった。何の対比で見ても
 たせいで、普通の考え（僕と対比した。僕はやっとな軽
 く一八〇を超えている、平凡な体格だった。僕は身長の上
 〇超えくらゐの、平（僕と対比した。僕は身長の上
 豊かな肩幅をして、ジャージの上からでもその筋骨
 逞しい肉体的な想像できた。肌は浅黒く、あるいはそ
 れは人工的なタンニングの成果か、知らなかつたが、
 あらゆる点で息子と似ていない。父の対比のため、
 出会った時は、その滑稽なまでの対比のため、
 年が幼児のように見えた。でも何度か会えば、
 だが、

に■ ■ ■ 年生はいってしていると判断した。からだの小児
 ランスや顔つきなどを見てだ。僕だつてだてに小児
 科医を何年もやっていない。
 父親は、少年の年齢からしても、僕よりちよつと
 年上程度なんだろうけど、巨漢の上には熊みたいな髭
 面で、二人並べば貫禄負けは明らかで、僕は彼にちよつ
 との子を連れていて、貫禄負けは明らかで、僕は彼にちよつ
 と嫉妬を感じていた。

僕は性的に目覚めた中学生くらいに頃、男の
 子の方が好きだった。あの父親みたいの頃、男の
 ことはまずない。女で勃たないわけじゃないから、
 結婚をし、子どもを作ることは可能だけれど、そう
 いう根本的な部分でパートナーを偽り続けて生きる
 のはフェアじゃないと考えている。それに僕は、

もつと重大な問題がある。はつきり言つて、僕は少
 年への欲望を抑えて生きる気がない。■家庭教師先
 輩の■学生と繰り返り、性行為をした。時には家庭教師時
 の■濃厚に。罪悪感なんてまるでない。今でも受験
 に成功した彼らは、僕と交流を持っていけど、他の
 の頃の相手の子は、ゲイになつたみたいだ。彼の
 子はストレートのままで（まあ厳密にはバイだが）。
 彼らは僕みたいな人間をよく理解する大人になつて
 くれる。僕らはもうと期待している。でも一般社会的にみ
 れば僕は法を犯し続けている。この方面の違法行為
 には特に、最近の法そのものも、世間の目も厳しい。
 妻がいた。やっても今こゝを悪いと思つてゐるから。
 じゃない。

僕の問題まだ深い。僕は先にも述べたように平凡な体格で、大人同士ではあまり印象に残らない、穏やかで、優しい顔をしてゐる。僕は実際に優しくて、穏やかだ。患者の子も母親も、すぐ安心してくる。僕は丁寧に対話する。少年と接する時も、常に優しいお兄さんやおじさんであり続ける。でもセックスが佳境に入ると、スイッチが切り替わってしまうことがしばしばあった。

河沿いの道で毎朝のようにすれ違う少年は、そんな僕をさやかに魅了し続けていた。でも彼は最初に出会った頃、僕の対象としてはいささか幼すぎた。もちろん、あれだけかわいければ、言葉は悪いが食えないことはない。現実問題として、彼をかけることも父親と一緒だった。し、現実問題として、彼をかけることも父親と一緒だった。

いつも反対方向から同じコースを走る彼らに、何度目の邂逅からか僕は片手を挙げ柔和な微笑を送り、髭面の父親が手を挙げて会釈してくれ、少年が恥ずかしそうにちよつとだけ頭を下げる。そうして数秒ですれ違ふ。それだけのことだつた。

ところが。

ここ半年ぐらいたろうか、彼が一人で走るのを見る機会が多くなつた。父親の仕事が忙しくなつたか、変わったのかもしれない。と僕は勘ぐつた。段階に達してゐた。■年生として、小柄な方だろうが、幼さの中にも男の子から少年への移行の過程、の危うさ、そろそろ主張し始める大人の筋肉の気配、

第二次 ■ ■ の訪れるか訪れないかの瀬戸際、それらが僕を強くとらえはじめ、僕はとらわれ続け、た。もう生えた。ただろうか、精通はした。ただろうかと、すれ違う度に足の進みを遅くして、振り返り、妄想してしまふ。また彼は幼児の無表情さ、男児の無邪気な表情を通り過ぎて、ここ最近はどこか憂いを帯びた暗い表情をしていた。一人で走っている時にそれは顕著で、謎めいていて、僕を惹きつけてやまなかつた。

僕は実際には使ったことのない、危険な道具をたくさん持っている。その使用を妄想する。いつか一線を超えてしまふだろうという危惧を抱きながらも、道具は増えていっていた。

年明けの日曜日、僕はとうとう、流れ次第では一線を破つてやろうと決意し……

この場所を選んだのは僕の「優しさ」だった。

僕は、からだを返して仰向けになり、膝を抱えてうめく少年に歩み寄り、かがんで、「大丈夫かい？」と白々しく声をかけた。穏やかで優しげな表情と口調で。

少年は顔をしかめ唇を噛みながらも、
「大丈夫……です……」

「痛い！ 痛いッ！」

11 怪 少年独特の掠れた高い声が僕を高ぶらせる。彼は
我のせいだと思っっているだろう。でもくるぶしの

12 焼けるような痛みは……

「具合が悪いみたいだね……」

僕は少年にまたがり、頬に手を添え声をかけた。

「あ……ふ……」

ろれつが回らないだろう……

2

「大丈夫かい？」

僕はベッドに寝かせた少年の顔を覗き込んで、

白々しく訊ねた。頬は紅潮し、目つきは覚束ない。

そそるな。

……明日もたぶん走れる。僕がこのあとすることにもよるだろうけど。

「名前訊いてみるかな？」

「大樹です」

知らない人に名前を教えちゃいけない。最近の学校ではたぶんそう教えている。登下校時、名札もつけさせない。でも少年はフルネームで答えてくれた。医者という肩書きと、僕の温厚そうな表情が、役立っているわけだ。

が、おや、早生まれか。年齢の見込みは当たって、いたが、学年は思っていたより一つ上だった。ずいぶん小柄な■年生だ。話し方はかなりしやきつとしてきた。小柄な礼儀正しい子のように。それにいい声だ。体格た。礼儀正しい子のように。それにいい声だ。体格相応の、男の子としては高い声で、少し掠れた、そ

「そる声だ。」

「大樹君、僕に見覚えはないかな……」

僕は「大樹君の顔に、覆い被さるように近づいた。少年は「え……」と戸惑ったあと、急に口を押さえ

「きもちわるい……」

「大樹君は覚えてないかも知れないけど、たぶん何年も前から、朝、しょっちゅうすれ違ってるんだよね。挨拶もしてくれてる」

「……お医者さんだったんですね……」

まだ、大樹君はちよつと驚いたように言った。もちろんまだ、僕を疑いもしない。むしろこの一瞬、信頼と安心は高まったかも知れない。むしろこの一瞬、信頼と

「おお、覚えていてくれたんだね。うれしいよ。前

から一度君と、遊びたかったんだよね。僕は君みたいなかわい子が、大好きだから」
後半のセリフを理解するには、かなり時間がかかるはずだ。

……少女と違って、自分がある種の大人の性対象になるなんて感覚は、■学生の男の子にはほぼない。

「騒ぐなよ。ちよつと遊びたいだけなんだから。大人しくしてればお互い楽しめるはずだよ。少しはね」
大樹君は顔を左右に振った。恐怖に見開かれた二重の双眸から、涙があふれそうだった。その表情は僕をとっても興奮させた。

「そりや残念だな。僕はゆっくり遊びたいのに。でも大樹君が大きな声を出さずに、大人しく何でも言うことを聞いてくれれば、早く帰れるよ。苦しい思いもあまりしなくて済むだろうね……」

「ここらでようやく、■学生男子の大樹君にも、僕の性的な意図が少しづつ伝わっていつているだろう。少年の腹部は柔らかい。幼い、薄い脂肪に覆われて、外見上、腹筋の「割れ」はまだ露出していないが、強く撫でさすると、筋肉の発達を手に感じ取ることができる。シャツをさらにまく……」

「んむむ！」
一度解放してやると、ショックで見開かれた目から、また涙があふれていた。

……彼は全身に力を込め、からだを突っ張らせて手足をいろんな方向に伸ばしてもがき苦しんだ。「い、た、い……」という悲痛な高い声を聞かせてくれた。そう、痛いのだ。

「先生の言うこと、何でもききます……」痛いことしないで、と言われても今度はこっちが約束を守る自信がない。

……少年は今、大切な部分を一つ、犯されたのだ。

……大樹君は目を閉じて、強い刺激には、「ん、ん！」と唇を噛んだまま声を漏らし、鼻から荒い息を吐いて反応した。身を振らないと耐えられない時

もあるようだった。性器は今はしっかりと勃起し、ボクサーブリーフの一部を湿らせているようだった。どう見ても感じているようにしか見えなかった。

「……オナニーは、知ってる？」

間があったが、大樹君はちゃんと目を開いて僕を見ていて、答える気はあるように見えたので、少し待った。

「知ってます」

「したことは？」

「友達が教えてくれたの？」

興味津々だな。

「……でもたぶん何か悪いことしてる気がして……」

…」

「じゃ、始めて……」

僕はベッドから降りて、立って腕組みして、大樹君を見下ろした。大樹君は薄目で僕と、自分の性器を交互に見て……、

まだ頂点に上り詰めるには早いのだ。

「もう少し我慢だ。いいね？」

大樹君はまたうなずく。洗脳を受けた囚人みたい
に。

「お仕置きって……」

大樹君はちよっと首を持ち上げて、不安げに僕を

「気持ちいいのかな……？」

「痛い……」

大樹君は本当に苦しげな顔で、うめくように僕に訴えた。僕はその言葉と表情にドキリとした。胸が締めつけられるような、それでいてたまらなく高ぶらされるような、二律背反の気分だ。

……天国のような地獄のような体験だ。僕はこの幼い少年の、健康な肉体を穢し、通常この歳で味わうことのない、異常なゾーンの激しい性体験を無理矢理与えて、彼のセックスに対する感覚を狂わせて

しまいたい……

終わる頃には君はもう別の人間になっている――

叫ぶように声を上げながらも、語尾を丁寧語にする大樹君は、とても愛おしかった。

……いつまでもその快感の淵に沈んでいたいかなように。

相変わらず凡庸で、人の良さそうな顔だった。でも額には汗がにじみ、気持ちの高ぶりは隠せない。悪意の顕れについては、僕自身にはなんともわからない。

4

「何、するんですか……」

属の手錠をかけた手首を引っ張り、ベッドの頭側の金大樹君はまだ気怠い声で訊いてくる。暴力を加え、陵辱を加え続ける僕に、彼は丁寧語を崩さない。それは僕への畏怖心からというより、彼の人柄とか育ちによるものだろう。あるいは、教育とか。

「僕が君にやってあげたのを、まねしてがんばってくれればいいんだ。まさか嫌だとか言わないよね？」

「セックスって知ってる？　もしかして性交って習うのかな」
ちよつと間があつた。でもぼそぼそと答えてくれた。
「授業あつたと思うんですけど、僕休んでたと思います……」
ふむ。

大樹君はいちいちうなずいてはいるけど、少し目が泳いでいるように見えた。子どもなのにセックスしてしまつた（無理矢理させられたんだが）ことに、ショックを受けているのかな。

「ひっ、痛っ……」

高く掠れた声で悲鳴を上げると、大樹君は足を突っ張って、苦しげな表情を見せた。

「あ……抜いて……下さ、い」

ガチャツって手錠が鳴った。

それはやはり少年の禁断の領域に踏み入り、穢れない（なかった）こころを犯す行為だからだ。穢れ

「イツ……た！ 痛い……せ、先生……抜いて！

抜いて、下さ、い！」

大樹君はかなり強く、悲痛に苦痛を訴えた。からだを振っていた。そこまで痛いはずないと思うけど

な。

「まだ準備だよ。こんなところでやめるわけないだろう？」

「もっともっと拵げてあげようか」
頭を上げた大樹君は首を振った。涙がつつと流れて、ふつくらした頬を伝った。

本当はやめてとか嫌だとか言葉にしたいんだろう。でも言っても無駄だし、逆効果かもしれないと、大樹君は理解している。賢いね。

「あ、あ。先生！先生！」

25 げた。何か訴えようと大樹君はがばつと上半身を持ち上げた。手が拘束されているから、動きには限界があ

ね。そうだ、それでいい。その方が、楽で楽しいからね。落ちて行け。

6

一方的に責められて身を振ったり力んだりしていただけのようでも、結果的には僕より大樹君の方がよっぽど運動している。その証拠に、彼は汗びっしょりで、色白の肌を全身紅潮させて、疲れ切っている。んだから。

急に大樹君が、「ああアッ！」って、かなり大きな声を出したの

で僕はどきつとした。隣に聞こえちまう。

7

「ちよつとくすぐったいかも知れないけど、動かないで」

「読める？」

と訊いてみた。

「どれい」

迷いがなかった。不確かな記憶をたどるというような答え方ではなく、確実に知っている言葉を言う答え方だ。隸なんてなかなか難しい。もちろん■学校では習わないだろう。

27
「すごいな。よく知っている。でもニュアンス的には物と言うより、家畜に近いかな。主に労働力とし

て売買される。前世紀まではかなりの先進国にも堂々と奴隷制があつたし、今だって実質的な奴隷生活をしている人は世界中にたくさんいる」

僕は立つて、腰をかがめ大樹君の顔を覗き込んで、単刀直入に狂った提案をぶつけた。笑顔で、穏やかに。

「でも僕はそんなことをしたいんじゃない。たぶんする必要もないと思つてゐるんだ。君は賢い子だからね。それに礼儀正しい。答えを聞こう。あまり時間にはあげられない」

「おやおや、大樹君は実は嘘つきかも知れないね。まあいい。これね、僕のが大きくなつた時より細い

だろ……」

どうするか見ものだ。彼は左手でそれを握り……
その視線の意味は、僕には理解できなかった。

8

この子は、僕には現時点で理解できない、秘められた性質か事情を持つている。僕はそう思った。約束が守られれば、それは次第に明らかになるだろう。「いいだろう」
でも僕の予測を超えた展開が、待ち受けているよ
うな気がした。それは予感だった。

続きは本編で！ 本編は94P。8章。約五二〇〇〇字。Part2に続きますが、単独でも楽しめる内容となっています。